
神とループと証明と

白河とく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神とループと証明と

【Nコード】

N6313Z

【作者名】

白河とく

【あらすじ】

ただ、神様に抗い、戦う話

戦いの始まり

今日は入学式。

俺は早くに学校についてしまつて暇を持て余していた。

新しい友達を早めに作っておきたかったからだ。

数分経つとポツポツ人が入ってきた。

そのうちの数人と適当に会話して仲良くなった所で先生が入ってきた。

「席に座れ〜」

そういつて先生は黒板に文字を書いた。

「俺の名前は〜」

そんな下りが始まり、自己紹介が始まり、先生がクラスから出ていった。

出ていつて30秒くらいたったとき突然アナウンスがなった。

「ピーンポーンパーンポーン」

「入学おめでとう皆さん！！これから楽しい高校生活ですね！！まつ送れないんですけども。皆さんには今から出席番号1番の人から自殺してもらいま〜す！！」

「どういうことだよ!?!」

「悪ふざけかよ」

クラスメイトが騒ぎだした。

一体どうなつてるのか俺にもわからない。

ただ、悪質な嫌がらせとかそんなレベルの事ではないだろうと思つていた。

「今から絶対条件を言うからよく聞いてね

まず、僕は神です。次、君たちは最終的に死ぬのならば、どんな自殺でも良い。この二つだよ 多分みんな狂っちゃうだろうけど頑張つてね んじゃとりあえず先生殺したから掃除ロッカー開けるね〜」

そして掃除ロツカーがあいた。

ゆっくりと先生の死体が倒れた。

クラスメイトは悲鳴をあげたりしていた。

「これで信じたかな？んじやはっじめまゝす！！名付けて、神様の暇つぶしゲーム！！」

みんな僕を頑張つて楽しませてね！！」

俺の長い長い戦いがこの時始まった。

死亡

「1番 哀川静香 君はどんな自殺を望む？」

10秒以内に答えてね じゃないと強制的に死んでもらうからね。」
クラスメイトの男子の数名が叫ぶ。

「なんで俺たちがこんなー」スパツ

男子の内の一人の首と胴体が離れた。

「うるさいよね？それにスピーディーじゃない。僕はダラダラしてるのが嫌いなんだ。」

んじやはい、どうぞ〜」

自称神が数を数え始めた

じゅうう、きゅうーう、はあーちい

それは哀川さんにとって、最後の10秒だった

彼女は一言もしゃべらず、ただ顔を涙で浮かべて死んだ。 爆発して、死んだ

俺、、、嫌、俺たちはその10秒と哀川さんの最後を、、、俺たちもああなるのかと、そういうことを心において見ていた。

哀川さんは0と言われた後、唐突に体の内側から爆発したのだ。

「次、2番 切口襟」

又も奴は数え始める。

切口さんは、ただしたを向いている。

しかし5秒を切ったところで口を開けた。

「楽に、、、楽に殺してください。」

彼女は眠る様にしんだ。

そして、消えた。

俺の死の末路、そして見据えること

切口さんが死んだ。

順番は残酷にもどんどん進んでいく。

俺の名前は立川光太

よって順番は比較的后だ。

自殺方法は切口さんと同じ安楽死の予定だ。

覆せないゲームに抵抗するほどおれもバカじゃない。

でも、心の中で必死に生きたい！そう願うおれもいる。

少しでも抵抗して、こいつの鼻っ柱を折ってやりたい、そう願うおれがいる。

「立川光太」

名前を呼ばれた。心が恐怖、怒りで固まった。それは次第にこんな理不尽なゲームをさせられているという事実に対する怒りのほうが大きくなっていった

おれは、、、おれは、、、

「お前を一発殴ってから死にたい。」

その思いは行動に変わった。

「お前の事を思いつきり殴ってからおれは死にたい！！」

精一杯の声で叫んだ。

「へえ、君面白いね。でも僕は体を持ってないんだよねえ」 神だから。どうしてもっていうんなら君、このゲームから抜け出してみなよ。僕は君に抜け出されたら、いや人間ごときに僕のこのゲームを壊されたら僕は怒り狂うよ。」

そうかい

「じゃあ君、もう一回自殺方法教えてくれるかな？」

カウントが始まった

おれは—————

打開策

「起きろ。」

朝知り合つた佐々木成彦の声だ。

俺は起き上がり

「ん？俺はなにしてたんだっけ？」

佐々木に質問した。

佐々木は朝見た時のような晴れやかな笑顔で俺にいった

「君は僕を佐々木だとおもっていないかい？」

僕は神だよ。」

ああ、そうだったな。くっそむかつく神だったな。

「君の死に方はものすごく特別な死に方だ。

神は嘘をつかないからね、最後に死ぬのならばどんな願いでも聞いてあげるのだよ。」

えっへんと胸を貼って答えた

「まあいい、でもお前なんでそんな姿なんだ？」

「いや、君が僕を殴ってから死にたいみたいなることを最初にいつてただろう？後の死に方を聞くとさっさと殴ってもらって死んでもらった方がいいとおもってね。」

ふっざけんな、俺があの時瞬時に考えついた打開策をそんなあっさり流されてたまるか！

「嫌、それはいい 今の自殺方法で継続だ。」

「ええ〜めんどいなあ、佐々木の体を借りてないと君と付き合うこともできないし」

そう、俺が決めた自殺方法は

【あんたを彼女にして、10日間過ごした後、あんたが車にひかれそうな所を助けて死亡。】だ。

正直かけだった。こいつがこの提案を受けてくれればとりあえず時間は稼げると思ってやった。

とても人間が作れる顔とは思えなかった。

「お前、俺になんかしたんだな？」

「私はなっにもくっしてないよお？僕はただ遊んだだけえ」
言葉がおかしくなっってやがる。

こええよ。小便ちびりそうだ。

これだよ。これ。俺が教室で感じていた恐怖だ。

いつ俺はやられた？こいつに反抗したときからだ。

「おい、お前の馬鹿げた自殺方法で俺は殺せないはずだ。なぜなら俺の意思での自殺ではないから。お前はもう一度俺に自殺方法を選ばせなければならぬはずだ！！さらにもう一つ言わせてもらう。

お前はルールを破った！！俺のいう事を一つ聞いてもらう！！」

「いつてみるよ」

無表情の顔になった。

「俺たちを解放しろ。」

「無理だ。」

「なら俺にせめておまえと戦える程度のハンデをくれ。」

敵にこういう事いうのはおかしいがこれしかない。後がない。

「どんなハンデが欲しい？さっきみたいにラブコメで俺を落として解放落ちにもつてくかあ？」

舐め腐ってやがる。

方法は、ひとつしかない。

最後だ。これでダメなら俺は死ぬだろうよ。

ハッピーエンドも無理になる。

でもおkなら—————

「このゲームのルールを少し変えさせてくれ。」

俺はそう提案した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6313z/>

神とループと証明と

2012年1月3日01時46分発行